

吟香上海ままよ語り：新釈『呉淞日記』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 歌野, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4689

吟香上海ままよ語り—新釈『吳淞日記』

歌野博

よごれたふる綿みたよなくもたれこめ、わるいてんきだ。ゆきもふりそでさむい。ふるわたふとんに身をちぢめふわふわさだまらぬものおもいにまかせぬ。

こんなひはみように日本がしのばれます。ふるさと美作がしのばれます。

おいらのふるさと、美作は久米のおり、併和とかいて、はが、とよませるやま里だ。熊蔵、万三郎、元助、虎十郎のおとうとたち、お芳お梅小まちのいもうとたちつつがなきや。ああ、あいてえ、あいてえ。上海にいちゃままならない。赤んぼみたくだこねるのはおよし。

からにきて一つきあまり、おもいの外からというくにはつまらねえところだ。きたないくさい、くいものわるし、ひとも礼をしらぬ。孔子さまのおしえはくも隠れなり。

いみじゅう中国とはよくいった。あ片のぼうえきを御はっとなしただがためおきたいくさにやぶれていらい、おちぶれる一ぱう、およ

そ上国とはいえない。弘光からきいたはなしたが、へボンせんせいのくにアメリカはてつ道はしり、まちも整とんゆきとどき、からきしからの比でない。にゅうよるく、フランスばり、ろんどん、いざりす。せいようのくにが上国なり。

かといって下国とまではいわれない。曾我準造によれば、あふりか、天竺あたりが下国だそう。曾我は柳川はんのおさむらいだ。弘光がつとめるオーガストハード商会、しかくい字でかけば、王と京をあわせた字に記とかく。きんぎ、とよぶ。そこであつたおひとだ。天竺にひさしくとうりゅうしたこともあり、そのふう俗きくなるほど下国にちがいない。ひとはみなはだか、くいものもてづかみでくう。くいものは、やさいさかななどにたものに唐がらしをすりつぶしませてめしの上にかけてくうらしい。せつちんでもかみをつかわない。どうやってしりをぬぐうのか曾我にもわからなかったそう。おおむかしはぶん明さかえたくにだのに何処でどうまちがったものか。

おいらの日本はどうだ。からをおししようさんにしてずっとやってきたにだ。天竺みたいにならなくとも、これからずっとからをおししようさんにしてもしかたあんめ。せいよう上国のぞつ困になつちまう。だからおいらはおししようさんのくにのし角い字はなるべくかかない。

四かくい字より○っこい字がよみやすいにきまっている。ちょうにん、ひやくしょう、しょくにんはもとより、おりすけ、くもすけだつてよめる。じしょ、辞書どちらがかんたんか、かいてみなくともわかる。日本のがくしゃ先せいがかくい字でひっくりかえつてよむ漢ぶんでほんをかくのは、乙うげせないはなしだ。せん生だつて鬱なんぞのしかくいじで本をこしらえるのはさぞほねがおれることだろ。鬱はヘボンせんせいのじしょにものつけてある。いぎりすことばで、めらんこりい。康熙字典にはこんなじがごまんとある。よくこしらえたもんだが、みんなばからしいことだ。日本は五十じにごり字をいれても七十じばかりだ。こつちがよほどべんりなり。シナじんによませるならともあれ、たいていの日本じんにはちんぶんかんぶんの本こさえてもむ駄のほねおりぞんにしかならね。よんだひとをかしくくするために本はこさえるものだ。よめない本をつくるなんざ、どういうりょうけんだか。

おいらも江どでは昌谷精溪せんせい、藤森弘庵せんせいのでしになり、しおからいたくあんで儒しやくさいめしをたんとくつたから漢ぶんのつくりかたにもちつとはこころえがある。おかげでシナにきて筆だんにはこまらないが、とりどころはそのくらいだ。おいら

が本をこしらえるとしたらひらかなでかくつもりだ。

つまらないしあんにふけているとき、「吟香さん、ぎんさん」といいながらはいつてきたのはヘボンせんせいだった。

吟香だつてきまぐれにつけたなまえ、おやにもらつたのは辰太郎だ。十九のとし江どにでて、いっばし学もんしゅうぎょうに身をいれているうち学もんじょの林図書頭さまにたのまれ水戸はん江どやしきに学もんし南にいっくわう、三河の拳母はんにかかえられた。そこに辰という名のむすこがいて、さしさわるとて辰をとり岸田の太郎とかえた。おさむらいはだにあわずやしきをにげしたが、あそび呆けてきゅう金つかいはたし、よんどころなく深川の揚げやにほうこうした折そのだんなに名をきかれ出まかせに銀次といひます、といつたしよっぱな。ほう輩たちから銀こうとよばれ、きままに一しゅうくらすを是とし、きままだの、ままよだの、しよつちゅううそぶいて、ままよのぎんじ、と名のる。しやみ線いれたはこ持ち芸しやの供するはこ屋か業、遊じよやのしゅじん、ふる屋のさんすけ、めし屋のだんな、きのむくま、と世をとつかえひつかえてきたのも、ままよのころにしたがつたまでのこと、つくづく名まえはこころになじむものにかぎるとおもう。名は体をあらわすべいか。

がくもんのあるひとが、陸放羽なる知られたからの詩じんの吟到梅花句亦香なる詩のあたまとしりを合わせたもの、銀こうは韜晦といいふらす。かくす爪のあるじゃなし下すのかんぐりににたが打っちゃらかしている。ヘボンせんせいの名もほんとうはヘップバーン

だ。ヘッパバーンをはや口でいえばへボンにしかきこえない。だから平文とせんせいは日本もじでかく。平凡のほうがちがいが体をあらわさない。

へボンせんせいはふるしきをほどいた。たくさんいただきましたのでおすそわけしますという。あざやかなきいろがこぼれた。みかんだ。さんきゅうべりいまっち。まわらないしたでれいをいった。せんせいはにこにこしながらみかんをむいてくれる。あまずっぱいしるが寝おきでねばった口のなかをうるおした。いろもあじもかおりも上もので古さとがまたなつかしくなる。

「デクシヨナリーはあとひといきです。はるごろには花をさかせます。岸田さんも日本にかえることができます」

おいらのかお色からむねのうちまでよみとったらしい。せんせいはそういってデクシヨナリーの下ずりをおいていった。できあがったら美華書館にとどけておいてくださいとたのまれた。

弘光はまだ香港からかえてこない。しょう月にならないとかえってこないそうだ。ともだちもないからさみしくてこまったもんだ。

慶応二年大晦

みょうなゆめみたから寝ざめのきぶんがすこぶるよろしくない。ゆめとうつつのあわいをだらだらたゆたい、どちらかにしっかりいかりをおろせないうち、すずめのさえずりにまじってしわぶきのこえがきこえてきた。おまんまたきがおきだしたようだ。おまんまた

きはしわだらけのばあさんと成りのあばら屋にすんでいる。かおはどこからみてもばあさんだが、としをきいたら四十というからおどろきだ。く労をかさねたすえのものにこだわらないきまえで、おまんまもよくたける。支那のめしはだいたいいますずいがのおまんまたきはめっけものだ。

ずっとねていたいがかもういかなない。おきだすふんざりがつかない。ままよ、とつぶやいてみてもいづものいきおいわきあがらず人せいがどんづまりになったよな塩たれたきぶんなり。一ねんもどんづまりなり。ままよ。すずめがかしましくなくてくれるのでおきてやった。

おおつごもりでもいそがしくもないのはみょうだ。かけ取りもない。どころか、かみでうめのはなをこしらえたり、きのむくまま、えをかいていると、できあがったしなをとどけにきたこん意のひょう具やが、だら四、五まいかしてくれろという。ひとにかすほどもってないとことわるが、かきつけまでさしだしてくいがられだら三まいかした。

ばちばち、ばちばち、ばくちくのおとがやかましい。でかけようかとおもったが外はさむそうだからよして厨人がもってきてくれたかしわのやきとりでさけをのむ。

のむほどに日本のほう輩たちがしきりにおもいだされる。いまごろ横浜の小林屋や海屋でおいらのうわきをしているだろう。石井潭香せんせいはお洒くらって吟公吟公とおらび、富さん格さん仙さんたち上野あたりのいざか屋ではいやらかし、吟さんはからのじょ

ろう屋をひやかしているだろう、とわらっているだろう。野沢屋、柳圃、紫雪さん、そのほかおおぜい、おいらをさかなににぎやかにさけをくらっていることだろ。

いぎりすでも、林、伊藤、川路、中村、箕作のめんめんがおおみそかのえん会で日本ばなしにはなをさかせ、おいらのことをうわさしあっているだろう。箕作きょうだいは十五と十二だからあまりさげはのめないだろうが。くしゃみがでないのは定めしとおすぎるからだ。

格さんのことがきになった。上海にたつまえのそうべつとうたけがおひらきになったとき、格さんからそうべつとうたをわたされた。ふうがしてあり、からにつくまではあけてくださるな、という。みななどについてすぐ、ふうをきってみると、浪のうへに君をおくりてはかなくもこけの下にてまつぞかなしき、とあった。すぐにでも死にそうではないか。ふうをあけるなといったのも心ばいさせないためだったのか。

格さんは精溪せんせいのはじゆくでまなんだなか兄だいどうぜんのつきあいだから心ばいだ。格さんのおやは田崎草雲なる絵かきだが格さんとはうまくいっていない。格さんはおんなのことでたいそうくろうしていた。へんなりようけんおこさねばよいがしんばいだ。

よくはれている。かぜもふく。ぎやまん障子とおしてそとをみれば、おまんまたきのあばら屋みえ、さむざむとした枯れきかれ草がものすさまじげな冬げしきつくりだしたるなか、たいそうあおお

とした草あり、やなぎ芽ぶき、ときのうつりもはやいもんだ。じきにはなも咲きます。はるもやってきます。はやくかえろう。日本が一ばんいい。

だらだらさけをのむ。ぎやまんにたまったゆげに竹をかく。竹をかくと気がはれてよい。このよに竹ほどよきものほかにあるまじ。すくくとたつ線のいさぎよさ、乙なみどりのいろ、ふしぶしのおちつき、はつらつとのびる葉。竹のようでありたい。切にそうおもわれてくるのだ。

ゆきがまいだしている。だらだらとさけをのみつづけているうち一にちがにげてしまった。

さあ、きょうもひがくれた。ことしもこれっきりだ。慶応二ねんとも、やがておさらば。シナでおさらばするとはおもわなんだ。

だんだん、さきへさきへといくのだ。さきへいきついたところで死ぬのだ。ひとにころされないように楽なみちとおって、おもしろいたびをするがいい。ほねおって天かとってみたところで死ぬればそれまで。むすこに天かゆずるとて、むすこもおいらのからだじゃなし、つまらないわけだから人せい行業のみときめ、ままよとふつきり、かねでもこしらえうまいものたら腹くっっておもしろいめをするのが一しよのとくなり。

慶応三年正月

ぱちっ、ぱーん、ぱばーん、ぱちぱち。おしよがつなり。てん

きよし。ばくちくがあちこちではせている。つづみやどらのねもする。慶応三ねんさん、おはつにおめにかかりやす。ことしもよろしゅう。

かきぞめとしゃれてなん枚もかきちらしたあと、小東門外にある美華書館にいく。ねんしのうたげのさいちゅうなり。黄延元、涂子渠、高鶴亭たちおよそ二じゅうにんもいる。ぶたのしおづけをにたもの、あひるの丸に、うめ、なつめのさとうづけ、くり、りゅうがんにく、ほしがき、くわい、檳榔、すいかのたね、きんかん、杏仁、落花生、りんごようかん、みかんのむいたのなどにぎやかにらんでいる。きょねん呉虹玉のむすめのよめいりのしゅう儀によはれたときのりょう理とよくにている。くちとりの、のしあわびがはなはだ美みでこれをさかかにさけをのむ。

へボンせんせいはい、おうちでおかみさんとしん年のおいのりをしているだろう。

滬、このむつかしいじは上海だ。よみは、こ、かんたんだ。滬のまんなかにあるおしるが滬城すなわち上海城、そのなかにある皇廟に涂子渠らとうちそろっていく。小東門街をぶらぶらとあるく。ぱく竹がやかましい。しょう月とてやすんでいるみせがおおいが道ばたでにしきえならべてうるものあり。

ぶんぼう四ほうをうる曹素功のみせのまえからむす子、岸せんせい、恭喜恭喜、こんひいこんひい、といいながら出てきた。おめでとうござります、のころだろう。そでをつかまえよれという。まんじゅうなどごちそうをだしてくるが美華書館ではらがふくれて

いたのであまりはいらない。竹をかいてくだされたとたのまれた。

皇廟に朔と十五にちだけ人のはいるをゆるすところあり。つきやまあり、いけもあるよいけしきのところだ。いたるところ石ひあり石ずりをするひとおおいらしく、みなまっくろになっている。ただけば鐘のようにいいおとがするという鐘山石があったので、つえでたたいてみれば冴えたおとがひびきわたった。江どの待乳やまふうのつきやまもあり。いけのまんなかのあずまやを湖心亭という。やぐらにのぼり四ほうのよいながめと茶をあじわう。

正月五日

ゆめをみた。からにきてからゆめをなんべんもみる。みょうなゆめばかりでへいこうする。ゆめはみょうでふしぎがそうば、うつつのできごとをなぞったゆめならうつつとかわらないからおもしろくもなかんべえ。とおもえど、どをすぎてみょうだと、おそろしいよな気もしてくる。

あぶらと紛うぎらぎらひかるみずがながれおちているたきがむこうにみえる。きつね、たぬき、犬やうてきて、たきのそばまできて、みなひきかえしていく。おそろしく毛のながいけだものがやうてきて、たきのそばまできて、やはりおどろいたようすでひきかえしていった。なぜひきかえすのか気になってそばにいたおとこにきいたがわからないとこたえる。

ふしぎなこちし、おとこをさそい、たきにちかづけば、へび二

ひき三びき。けだものがおそれてにげるよなへびでもなし、いぶかりながらちかづけば、でっけえうわばみがけだものをのみかけていた。さっきのけだものとすがたかたちはにていたが毛はみじかく、つのがはえ、そのつのがうわばみののどにいくこんでいた。そのまんま、かなりのにつすうたち、うわばみはやせおとろえているようにみえた。けだものはちっともうごかないからとうに死んでいるにちがいない。

ぶちころそうと手にしていたなぎなたでうわばみにきりつけた。きつてもきつても、かわがこわくてきれない。すこしうごくだけでにげようともせず、ちからのない目からなみだのようなものをこぼしながら、おいらのかおをみている。やっきになって、なぎなたをふりかぶり力いっぱいふりおろしふりおろしながらどうしてもきれない。おとこが大きなおのをもっていたので、おまえ、あれをうちころせ、というに、かわいそうだという。いまころさなければ、あとにどのようながいなをなさないともしれぬ、とかんがえ、おのをひつたくってうわばみのくびのあたりをちからまかせにうちすえると、ぱらっときれて、からだばかりがたきのしたにおちていく。のこったうわばみをみればいつのまにおいらのかおにへんじている、とみたところで目がさめた。

あさのおまんまをくっているうちわすれちまうゆめとちがひ、いつまでもねばりつきおまんまもすまず、なみだをこぼすうわばみのすがたにつきままとわれた。

うわばみのおいらがけだものの上をのみこもうとしたものの、

つのにくいこまれたまま、だから、時ににげられるうち首をきりおとされる、とうらなおうか。おいらがおいらを害するえんぎでもないゆめだ。

うらない捨てられない。ますますゆめのありさまがまぶたにひろがり、からだじゅうをむしばむいきおいだからやっつけられない。

ばくにでもくわせちまえ。ゆめをくうばくはゆめならどんなゆめでもくうのかしらん。このあくむも、むしゃやくくってうまいとおもうのかしらん。したのこえた美しよく家のばくと、いかものぐいのばくと両ほういるのかしらん。どっちみちばくがいなければなしにならない。

ばくは、きりんやほうおう、りゅうなんぞの、ひとのあたまがこさえたまぼろしのどうぶつのほか、まことのばくもいる。英華分韻字書の貌に、みずのなかとおかと両ほうにすむ、とかいてある。いぎりすことばでは、「*gibber*」てびうる、という。しんがぼうるでへボンせんせい、ばくをみたことがあるというが、ぶたよりはおおきくうしよりちいさく、五、六すんあるはなでつちをほりえさをくうらしい。ゆめは知らずいもならくうだろうという。せんせいのじしょにはのってたかしらん。

いぎりすもじのてびうるとシナもじの貌は、はたしておなじけだものをさしているだろうか。じしょづくりの大もんだいなり。ことばもじももの名まえだ。あるくということばも、足をたがいちがいいうごかしてすすむようすに名づけたなまえではないか。あるく、歩、うゐる、と名づけるのはすじがとおるが、ぶたみたよな

けだものと、あたまでこさえたどうぶつをいっしょにするのはいか
がなものか。おなじものだったらおなじ名まえでよかろうものを、
ことばとはふべんなものなるが、い大なものでもある。はじめにこ
とばありき、かみとともにより。せいようのいだいな書もつにある
というがむべなるかな。

ことばにかかずりあっているうち、あくむのどっけがぬけたのは
さいわいだ。

正月十日

弘光が香港からかえってきたので、ひさしぶり四方やまのはなし
する。ばくふの御よう船があらしにあい難せんし漂りゅうしている
ところをぎよ船にたすけられ香港につれてこられた。伊豆だいかん
江川太郎左衛門さまのけらい長門路取蔵あずかりの船で、やく人の
りくみいん四十にんちかくのせわでてんでこまいだったという。香
港そう督にもかおがきく弘光だからできたはたらきだ。

もつとはなしたかったが、きょうはいそがしいからまたくるといっ
て広東はっこの「中外新聞」をおいていく。弘光がかいたき事が
のっている。「日本名儒八戸順叔」とあり日本が八十せきのぐんか
んで朝鮮をせめとるかまえだとある。朝鮮が五ねんにいち度しせつ
をはけんし江どの公ぼうさまに拝えつするしきたりをやめにしたこ
とへのほうふくだという。ほんとかしらん。ふといまゆの下の金つ
ぼまなこはやさしいが、こく士のたぎるころを弘光はもっている。

おいらなんかとはちがう。

弘光はへボンせんせいといえのあった横浜の谷戸橋三十九ばんち
からみよう字をとって、やとひろみつ、というのはよ次にすぎない。
もとから谷戸さまぐれに八戸とすることもある。喜三郎とも順叔と
もなる。川越のだいかん手だいの家がらだ。

弘光がアメリカにわたったのは二ねんまえ。ウエンリート、ただ
しくは、ヴァンリード、とななるふしぎなじぶつにであつたのが、
弘光の幸うんでありふ運でもある。鎖こくのそ法おかしウエンリー
トの助しゅとしてあめりかにわたつた。おれじでんにめんかいした
こともある。日本にかえればろうやにいられることになる。きよ
年六がつ横浜までいきながら、じょう陸したのはウエンリートだけ
で弘光は上海にひきかえした。鎖こくのなんのぼからしいことだ。
弘光みたいな有いのじんぶつこそこれからの日本にはひつようなん
だから、からにとどめておいては日本はおおきにそんしつだ。

ウエンリートとへボンせんせいはいはこん意だから、弘光とへボンせ
んせいもこん意で、おいらが目をやんだときせんせいをしようかい
してくれたのも弘光だ。弘光はおいらの恩じんだ。

あの頃しよちゅう目やにがでてかたくかわき、ひとみをふさい
でろくにみえなくなつた。このままいっさいがみえなくなつたら書
もつともよめない。せかいじゅうのくにぐにをけんぶつすることもか
たからう。まいにちがにっしょく、みてえなもの。嘉永きちゅうの
とし、まっくらになつたそらをおもいうかべ、おぞけ立つた。

へボンせんせいのみず葉ですくわれた。

正月十五日

七つすぎ、きんきにいくために河岸へでてみると、あすとうるはうすに日の丸のはたがでている。

きんきに弘光はいなかったから美華書館によると塗り菓ができて校合おねがいます、と字しょの下ずりをわたされた。かえりがけ、あすとうるはうすのまえの河岸にひとだかりがしている。ひと垣おしわけちかづいてみたら日本じん八、九にん小ぶねからさん橋にあがってくるところだ。たまたま目があったのが鯛木、うしろから高橋がくる。おやおや、どういうわけで上海くんだりまで、たずねれば、あすとうるはうすの日の丸ゆびさし、あれはふらんすのふねでできた公ぎのひとたちがとまるところ、わたしはいぎりすのふねできましたから、ほかのほてるをさがさねばなりませんという。あすとうるはうすをみれば、なんと仙さん、清水卯三郎のうささん、もいるではないか。山内六三郎さん、いぎりすにいった箕作きょうだいとはいとこどうしの箕作の貞さんもきているそうだ。うれしさかぎりなし。はやくあいたいものだ、こころがはやるのをとめられない。

いろいろの手つづきがおわり弘光にやどのはいたのみ、おちついたところでもるはなしをした。貞さんはじ病のれうまちすのあんなばいがわるい、ときいてへボンせんせいにみてもらうがよい、と仙さん、うささんをどう道し、せんせいのところに行くがらすだっ

た。

みちすがら、おそれおおいことながら崩御があったとへボンせんせいあて横浜からのてがみにあったがまことかと、うささんにたずねると、まことさ、それもほう瘡でほうぎよになった、とこたえる。貞さん、田辺さんは、公ぼうさまのみよう代でふらんすの博らんかいへゆかれる、おとうとの民部さまのおつきだそうだ。民部さまは十四におなりで博らんかいおわたたあとふらんすでがくもんされるよし。せいよう上国のすすんだがくもんをされるのはよいことだ。りっぱな公ぼうさまにおなりになる日もとおくなかるべし。

ありったけのさけでさか盛り日本ばなしにしたつづみをうった。よふけまでおおいに酔ってわかれた。よいをさましてから下ずりの校合をした。

よくじつ、あすとうるはうすにいけば、うささん田辺太一さんがいた。田辺さんは博らんかいに出びんするしなを差はいする頭どりやくという。田辺さんの下でうささんは出びんぶつをととのえたり博らん会じょうの日本のあずまやで茶やのしみせをだすそなえなどで大いにはたらいたそうだ。

薩摩も出品するためにばくふに先んじふらんすにのりこんでいるという。さつまのうごきがあやしい、ぱりでよからぬこと、ばくふの位をよこどりするにひとしいことなどし出かしてくれないとよいが、と田辺さんがあたまをいためているようすだ。だから、ままよ、ぱりのことはぱりにいってからのこと、上海にいなさるあいだは上海をたのしむことです、とはげましたところ、しゅう眉をひらいた

かおつきで、吟香せんせい、ぜひ上海をあないしてください、と
う。

おぶぎょうの向山さま、お守りかしの山高いわみのかみさま、
ほか六、七にんのおやくにんつれて、城皇廟、湖心亭をあないする。
かけ足でけんぶつしたが湖心亭でおちゃをのみおえたころは五點鐘
すぎ、さてこれからよるのまちにくりだすによいじぶんといきごん
だところで、そろそろかえらなければなりませんという。こよい、
ふらんす領事かんにごちそうによばれている民ぶさまのおともとい
うことだ。これだからおさむらいはままならない。

へボンせいせいに、うささんの日本のぜにをだらにとりかえても
らい、うさん仙さん鋪木さんと、あすとうるはうすにゆうめしを
くいにいった。日本じんが二十めいばかりあつまり西よりの器ぐで
めしをくっている。ほうちようでにくきる手つき、さじでしるすく
うようすがへんでこでみていられない。がやがよとさわがしくぎょ
うぎもわるい。

「こんなもの、くえるか。こめのめしをもってこい、めし・・・」
だみ声のさけびがきこえたので、そっちをみれば、いすにあぐら
をかいたさむらいが給じのシナじんにおめいていた。シナじんはこ
まったかおをしていた。

さむらいのかおをたしかめて、おいらはとび上がるほどおどろい
た。端蔵ではないか。

三輪の端蔵。小がらのからだじゅうが尊のうじよう夷にこりかた
まったさむらいだ。民部さまの楯のやくだと、うささんがこえをひ

そめた。

三輪の端蔵とのいんねんは水戸はんの江ど屋しきいらいだ。さい
ごの五りようのきゅう金をふとこに屋しきをおさらばしたひだ。
さむらいたちがさけをのんでいた。いいのやろう、ということばが
なんどもきこえた。井伊さまのことだ。若ぞうだった三輪端蔵もそ
のなかにいた。くろ船あらわれ上よ下よの大きわざのじぶんだ。井
伊さまはそのころから開くくの急せんぼうだった。ひとむかしあま
りもまえのことだ。そののち桜田もんで井伊さまをきり殺したのが
あんときのさむらいたちだ。

端蔵とふたたびであつたのはへボンせんせいの目の療ようじよを
てつだっていたときだ。目をやんだ老若なんによにまじって町にん
の身なりにかえた端蔵がいた。端蔵はふところにあいくちをのんで
いた。せんせいをころしにやってきたのだ。

おいらはせんせいの徳のたかさを端蔵にはなしてやった。せんせ
いはりようじの料足をいっさいうけとらない。さむらいも町にんも、
いっ切わけへだてすることもない。目をやむひとびとのくるしみを
すくうだけだ。すくうことだけがせんせいののぞみでよろこびなの
だ。

耶そのしんじやだからか、はなしろんだかおで端蔵がこえをひそ
めた。耶そだろが坊ずだろが異じんだろが日本じんだろうと、
ひとのくるしみをすくうのは徳ではないか。端蔵はかえっていた。
三とせまえのことだ。

「おちゃ、もってこい。ちやいろのちゃじゃねえ、まっくろいの

も真っぴらだ、くさ色のちや、もってこい」

よっているのか端蔵はまだむちやをいう。日本からもってきたらしい菜づけのこうをふおるくでさしとって、いやしそうにぱりぱりとおとをたてくつている。せいようじんが端蔵たちの卓のまわりをとりかこむようにして珍じゅうでもみる目でみているから、こっちまではずかしくなってくる。端蔵はえりに手をさし入れちばしった目であたりをねめまわし、おいらにきづいたようだ。

「ぎん公じゃねえか。こんなところで」
ちどり足でちかづいてきた。

「あうとは、腐れえんがまだきれちやいねえな」

「おまえこそ、西ようえびすがうようよしている上海くんだりになにしてる」

わかつていても、れいぎだからたずねてやった。

「おうよ、ふらんすの博らんかいにおいでなざる民部さまのおと
もさ」

端蔵はじまんげにいきさつをながながともの語りかおをひきつらせた。

「西ようえびすどもが民部さまにぶれいをはたらいたらそのぼで
きる。さつまのいんぼうもかならずあばく。あばいて切る」

あからんだ端蔵のかおに死そうがあらわれているよに、おいらにはみえた。こいつはパリの博らんかいに死ににくつもりか。

「ぎんこう、おまえもいくか」

いきてえのはやまやまだが人じなしことがある。へボンせんせい

ひっ生のじしよをしあげるしごとだ。たがいのことばがつうじあうところ、おまえみたく切ったはったばかりにはならねえんだよう。おいらはむねのうちでこたえていた。端蔵ははなしろんだふうになちどり足でもどつていく。

小東門でうささんたちとわかれていえにかえた。

ひさかたぶりになつかしいほう輩たち、なつかしくもないが悪いねんの端蔵にさいかいし、こんやはころがさわいでなかなかつかれない。

おいらが上海へさがけしのがきょねん慶応二ねんの九がつ、つづいて弘光がきて、このおふたりさまはまだここにまごまごしているけれど、あとから川路、中村、林、箕作、伊東らいぎりす留がくのお坊ちやまがた、中村だけはとし喰ってるが、たち寄り、日本人がシナへくるたんび、おいらのころやすいものがおおぜいいる。

ちきゅうじょうのくにぐにをけんぶつするには打つてつけ、おいらもパリにいきたいもんだ。あの端蔵までがゆくてえのに支那においてけぼりではあんまりだ。

正月十七日

てんきよし。あさはやくあすとうるほうすへいく。お奉ぎょうの向山さまが紙をかってくるよういいつけられているところ、いいつけられたひとが、どこにいけばよいかみをうっていますか、ときく

のでいっしょにいきましよう、そのひと濹澤徳太夫さんと三馬路にいく。濹澤さんはご一行のかんじょう方をまかされているそう、だから日本のせにのとりかえのわり合いについてこうしりたがる。おいらもそんなにくわしくないから弘光にあわせるのだった、とくやんだがおそい。このひとおいらより六つ七つもわかいが、つらがまえに大じんのふうかくがある。

いそいで買いのし引っかえすとふな出のしたくにおおわらわのようすだ。十點鐘まえに民部さまが小ぶねにのりこまれる。いやしい風ていのシナじん船どうが背なかをだすので民部さまがそれにおぶさつてのりうつられるところが、なんだかきどくのようにみえた。民部さまはすこしわらっておられた。おきのじょう気せんへこぎだす。それからつぎつぎとおつぎのひとたちが小ぶねにのつた。仙さん、うささん、箕作の貞さんみな手をふっている。仏ちようづらの端蔵もいる。箕作きようだい、川路、中村らがいきりすにいくのをみおくれたときもいっしょにいきたくてたまらなくなつたが、こんどもそうおもつた。かなしいようならやましいようなきぶんて手をふつていた。おかのわかれよりもみのわかれのほうが、いっそうやるせない。

二月朔

じしよが四ひやくちようにまでできあがつた。いま、SHINJUU しんじゅう 情死、ということばのところまではんになってきたの

をきよう合する。てい、ゆい、ぶい、だぶりゅ、えくす、わい、ぜと。あと七つだ。

横浜でじしよづくりをて伝つていたところがやけにおもいだされる。せんせいはずくえに花ふだみたようなふだをならべていた。ふだには日本とえげれすのことばがぎっしりかいてある。どこへいくにも何もかかれていないふだをポケットにいれてもちあるき日本ことばをすなどつていたものだ。ひととはなしているときでも目のちりよのあいまでも、しらないことばがでてくれば西よう筆でふだにかきつける。

書もつにでてくることばは書もつをみればすみませんが、はなされていいることばは書もつにでてくるとはかぎらないから大せつなのです、らしい。

ふだをあるふあべとのじゅんばんにならべるのは目いしゃのしごとがおわたつた夕べだ。日本ごのじびきづくりにかけるへボンせんせいはものにつかれたようにみえた。

わらいがこみあげてくるおもい出もある。

「エスのところはまだすくないようなきがする、岸田さん、どうおもいます？」

そういわれば、さしすせそ、のことはまだありそうだ。

「すけべ」

「すけべ？すけべ、ってなんですか？」

「せんずり」

「せんずり？どういいういみですか？わらってないで、はやくおし

えてください。わたし、いそがしい」

二つともせんせいのじしょにのせられた。

こんなこともありました。

「岸田さん、しりとりしましょ」

じしょにのせることばがおもいつかないとき、せんせいがよくつかうてだ。ぎんじ。じょうし。しんじゅう。うまれぞん。うまれぞん、なんてことばをついでにこしらえてやった。じしょにはのらなかつたけれど。ひととうまれて、こぎたないちまたに一しょうをすてる、なんざ、うまれてきたかいいもへちまもありやしねえ。ごくろうのおおぞんというところだ。

「吟さんの、ままよ、おもしろいことばです。おのれに執せず大きなものに一さいをゆだねるといふことなですね。いいことばです。いざりすことばでは、れっと、いっと、びー、あず、いっと、いざ」

なりゆきまかせ。あくせくしたところであるようにしかならぬ。どうなるうとかまやしない。かってにしやがれ。かみほとけ、めにはみえないがじん知をこえたちからをもつまぼろしにいっさいがっさいをまかせきる。

「つゆのいのちもこいゆえならば、ままよてんぼのかわぎんちゃく」。じょうるり、本朝二十四孝のせりふだ。てんぼのかわぎんちゃく、ばかしは未だわからずじまい。この世にうけたいのちをこいつかいはたすもよし、せかいのくにといづくにをたびしてまわるもよかろう。

二月五日

石川と大庭をつれてまちにくりだす。石川は上海へ人じんや鮑をうりにきた。大庭はろんどんへ学もんにいくとちゅうだ。新々楼にいく。

支那のいんしょく店では、かなだらにゆをいれ手ぬぐいといっしょにもてくる。ゆにひたしてしばった手ぬぐいであぶらじみた手をきよめる。あるとき手ぬぐいをしばっていると弘光が、そんなにちからをいれてしばるのはよせという。手がこわくなるという。めめしいことをいう、ふしんのおももちでいたら、

「ひとにあつたときにはかならず手をにぎりあうのが西よりのれい儀だ。手のかわがこわいものはげ賤のみぶんとおもわれる。アメリカにいったおりプレジデンはじめ、たずねたさきぎの高きのひとびととつきあつたが、みながみな、その手のやわらかなことわたのようだった」

「そういえば、おいらんの手もやわらかい」と、わらってやったことをおもい出し、ちからいっばい手ぬぐいをしばっている大庭におしえてやった。

靖遠街にくりだした。靖遠街はさしずめ上海の吉わらだ。路じがつづれ織りみたくぶつ違い、かざりたてたじょろうたちがあやしげな色もようをおり出しているかいわいだ。とんにいすんしやんばあにいごそんにいっつう。駄舌とはよくいった。もづのさえずりがまだ

みにやさしい。

おじよさまも日本のおいらんとはおおちがよい。おじぞうさんの螺髪みたようなあたまに、らんやつばきのつくり花をかざっている。おしろいがぶあついものだから所どころはがれ骨とうの絵のようだ。ほおべにがまだらにはげかけているものもある。こしをかがめていたそうにちよこちよこあるくようすがおかし。てん足なんぞのべらぼうなふうしゅうのたたりだ。なんのいのりかしらねえがシナジんもおかしなことおっぱじめたものだ。

あるいてみると、すけべ、すけべ、とよばれる。才とりがしつこくつきまとうるさい。そでをしきりにひく。

一けんの女ろうやにあがる。五、六にんのじよろうがいすにすわっていた。日本でもめったにおめにかかれぬすこぶるつき的美じんがいた。ほかのじよろうは紅のふくをきているが美じんだけまっさおのふくだ。石川も大庭もおいらもその美じんをあい方にしたくてはりあった。くじびきでもジャンけんでもこっちがきめるのもつまらねえ。美じんにえらばせるのがおもしろかるう。大庭も石川もいづれおとらぬやさ男、やま出しのおいらとはてん地のちがよい、手のやわらかいものが美じんにあたるとしたらどうだんべい、といえは、それがよいそれがよい、ふたりとも手をうった。美じんのまえに三にんならんだ。

灯しが美じんのかおをてらした。ほおがひかり目がかがやいてくちもとがほほえんだ。

大庭が手をさしだした。おいらも石川もそうした。美じよはおず

おずとすすみでた。さしだされた三つの手をよけるように、すこしずつはなれてたっている三にんのあいだにたちどまる。りょう手をさしだしたまま、きよるきよるあたりをみまわす。ふしぎなげさだ。

うしろからわらいごえがおこった。紅ふくの女ろうたちがくちぐちになにやらさけぶごえ。めがみえない、といっている、シナことばのすこしわかる石川がおしえた。

おいらはちゅうにまよったおんなの手をとった。大庭石川しりめにおいらとおんなはへやにはいった。あんどんが弱わしいあかりをなげるかびくさいへやだ。

筆だんのことばを日本しきにくちにしてみたら存がいつうじた。なまえをきけば口でこたえるかわり手をちゅうにうごかし、手のかたちはふでをにぎるかたちだ。欠たてのふでに墨をふくませ、おんなのみぎ手ににぎらせた。かい紙をつくえにひろげて、おんなのひだり手をおいた。おんなのみぎ手がかい紙をすべった。かみのまんなかに、もじがすわった。戦。おんなもじらしいやさしいでだ。つづけて、文静、と口でいった。

「戦文静」

おいらはつぶやき、せんせいのにじしょに、戦戦、とあったのをおもいだす。BURUBURU。ぶるぶる。ふるえたのはおいらのほうだ。めしいの美じよのつよくひきつけるちからにすいよせられる。

「文静」とよびかけた。かおがあかるくなつた。

うまれたときから目がみえない。へボンせんせいもおて上げだ。

うんですぐ戦文静のおっかさんはみまかった。おっかさんのかかえられていたこの女ろうやにかわれた。

文静のからだからだよってくるにおいが、美作のいなかをおもいださせる。さけをつくるときのこめこうじがかもされるときのおいにおいだ。うっ、とうめきながら、文静がからだをくねらせる。

おまえさんだけどうしてあおいふくなのか、ときけば、あおがすきだからとこたえる。みたこともないのにおかしいでしょう？ちいさいころ、あおいふくがよくにあうとはめられたことがあるから。

そらのいろ、うみのいろ、みえないけれどころでわかる。ゆめだつてみるよ。かたちもいろもなにもない、からだがおぼえているおもし出みたいなものだけれど。

文静があおいふくをぬぐ、きぬ摺れからあらわれたさくらいろしたはだえにすい寄せられる。ひたいからはな、ほおぼねのたかまるあたりであえぐ息がかかる。みみたぶ、うなじ、のどぼとけから、ちぶさへくたる。ちくびをふくんでゆらす。あえぎがたかまる。りょう手でちぶさをわしづかみにする。ことごと、ちのながれがゆびのはらをうってくる。

文静のからだをたびしているきもちがした。山ありおかあり野はらあり、うすいはだのすぐしたをちのかわがながれている。ここにもせかいがある。きゃしゃな文静のからだにあるき尽くせぬほどのひろがりがある。

おどろいて、みをはなした。

文静がこしをうかりょう手をおいすがるようにさしだす。りょ

う手でうけとりつつみこんでいたわるようにした。

おまえはなにをしているのだ、どこからともなくみみにしたたってくるこえがある。ままよてんぼのかわぎんちゃく、とおっかぶせる。

文静の十ばんのゆびがみょうに気ぜわしく、それでいてねん入りにおいらのかおの造作をくまなく撫でつける。しゃく取りむしのようだ。おいらのかおかたちをこころの像にむすばせようとしているのかしらん。

三月六日

きょう英語をさきにして和語をひく方の字しょがはじめて版になってくる。いんでくす、という。

三月十一日

一あしききに日本へかえるへボンせんせいのおくさんにあいさつした。手をにぎりあって、すぐにおいかけますといえば、おくさんにつこりわらって、まってます、とかえした。おくさんの手はつきたてのもちのようにやわらかい。

三月十二日

へボンせんせいのおかみさん出帆する。

三月二十日

柳絮かぜにひるがえって雪のようなり。

三月二十一日

きんきにいく。弘光、香港にゆくしたくでいそがしそうだったからかえる。

暮れがた弘光くる。香港からふらんすにいくという。弘光は自由に世かきをかけまわる。うらやましいおとこだ。とう分あえないだろう。だら十まいせん別にふんばつしてやった。素かんびんになつたが、ままよ、じしよのでつだいたほう美にへボンせんせいだら五十まいをくれるはずだからそれまでのしんぼうだ。

弘光がもってきた老酒のいいものでつう飲した。弘光はあめりかで盲じんのための学こうをみたことがあるという。ふらんすではアユイというひとが盲じんのための学こうを八十ねんもまえにつくり、かみのうえにうきあがらせた凸もじのあるふぁべとをくふうし、よみかきをおしえたそうだ。さらにアユイの学こうでまなんだブライユという盲じむが、あるふぁべとを点であらわすくふうをした。いづれもゆびでよむもじだ。

盲じんももじがまなべる。書もつもよめる。さすがに上国だ。盲じんがうつちやらかされている日本もかもおなじく中国だ。上国

にしあげるため、おいらもなにかてつだえるか。おいらのかおをゆびでよんだ戦文静のまぼろしがふっとまぶたをかすめた。

三月二十三日

辞しょにあたらしく名をつけてくださいと、とへボンせんせいにたのまれたので和英詞林集成とつけてみたが、やくたたずのうたの詞より語のほうがよさそうだから和英語林集成にした。一りんねあげしてやった。へボンせんせいだら五十枚くれる。

四月一日

てんきよし。春がすみたつ。うえき鉢にはちがきてぶんぶんいう。柳絮まう。

四月二日

あき日本からてがみ五通とどく。格さん行方しれずとのよし。むなさわぎがしていきだわしい。

辞しょのいん刷おわり本になるのをまつだけになる。しあがった本におめにかかるのは横浜のことになる。らい月そうそう日本にかえるとへぼんせんせいがつげた。あとひと月でいきだわしいシナともおさらばだ。

いきだわしい。いきぐるしくてたまんねえ、みたいなときにつかうらしいが今どきはやらないことばだ。せんせいはいじょづくりの材りょうにおお昔のじしよ伊呂波字類抄のたぐいをこまめにあつめていたから今の日本じんがしらないことばもたくさんしっているどおりだ。だれもつかっていない、やくたたずのことばを、じしよにのせることばはないじゃないですか。せんせいはこたえた。

だれかがつかっていたことばです。すたれたことばもりっぱなことばです。じしよにのせて後のひにもつたえるのはだいいじなことです。ことばにみぶんはありません。うつくしいことばもきたないことばも、きよいことばもみだらなことばも、ことばそのものはみなおなじ格なのです。じしよにのるし格があります。すたれたことばや本のなかでしかつかわれぬことばにはしるしがつけてあります。たとえば、天人五衰の五衰 GO-SVI のまえに十じ架みたいなこんなかたち「十」のしるしがついてます。

五月朔

やなぎのわたみたくまっ白なくも青ぞらにたなびいて天きよし。かおをなでゆくかぜも心ちよい。さい先よいたび立ちだ。さあ日本へかえるのだ。

大ぜいにみおくられ出帆した。へボンせんせいとおいらも甲ばんにたたずみ、しばらくことばはななかった。うるさかったかもめのなき声もたえた。上海がみえなくなつた。またくることもあろうか。

ままよ、ままよで半としまり、上海にはじめてなごりおしきのよなものをおぼえた。

せんせいも物おもいにしずんだかおでうみを打ちながめてらっしゃつた。ひいでた額におちかかふる髪がかぜになぶられている。せんせいと出あって四ねん、しらがもめつきりふえたみたいだ。二万もの日本ことばをすなごつた勲しようだ。

「吟香さん、よくやってくれました。りっぱな辞しよができてこんなうれしいことはありません。アーネスト・サトーさん、あのかたにさいしよに日本語をおしえたのはわたしですが、いまはわたしよりはるかにうまくなられ、横浜であのひとのみぎにできるものはいません。そのサトーさんもずいぶんはめてくださいました」

「本になつたのをはやくみてえもんです」

「ところで日本にかえつたらなにをやるつもりですか？」

「さあ、なんにもかんがえちゃいせんが・・・」

「ままよ、ですか」とせんせいはほほんだ。

「ままよもままよとうっちらかすためのこう実ではつまりません。けつ果をままよとうっちらかしておいて、おのれのしんじるままにことをなす、そんなままよが強いのです。吟さんの韜晦しゅみはおもしろいけれど、それだけではなにごとにも成就しないのではないのでしょうか」

し角いことばでできなすつたが、ず星だ。

おいらはせんせいのえがおにうなづきかえし、ままよとつぶやいた。(了)

(吟香、すなわち岸田吟香は、幕末から明治にかけて、儒学師範、風呂屋の三助、置屋の主人、目薬販売、製氷業、ジャーナリスト、廻船商社、訓盲院開設、日中交流等、多方面に活躍、破天荒の人生を生きた。『呉淞日記』は、吟香がヘボンの助手として上海に滞在したときの日記である。)

